

台湾で最も有名な日本の町、 北海道東川町の国際交流の軌跡

宇佐美喜昭 (元・交流協会台北事務所経済部主任)

北海道上川郡東川町。殆どの方にとっては初めて耳にされる町名かもしれないが、日本の町としては台湾で最も知名度が高いと言って過言でない。台湾との本格的な交流が始まってまだ5年にすぎないが、台湾では、1～3ヶ月ほど滞在しながら日本語を学べる町として広く知られるようになった。同町に日本語を学びに行った台湾人はすでに400人を超える。

東川の名は、アイヌ語で「日が昇る川」を意味するチュプペツ(忠別)が転じたものとされる。市街地は旭川空港から自動車ですぐ12～15分ほどに位置する。

カメラ好きの方なら、高校生を対象とした「写真甲子園」開催地としてご存知かもしれない。買い物に注意深い方なら、都心のスーパーでもみかける高級野菜「軟白三つ葉」の産地として認識されている人もいるだろう。

東川町には天人峡温泉、旭岳温泉、中岳温泉といった温泉地があり、地元では旭川市の奥座敷として知られる。また、大雪山系への西側の登山口にあたる。大雪山の伏流水も豊富に沸く。北海道でも屈指の水質で、湧き水を無処理で生活水、飲用水として利用している。このため濾過水を使う上水道の普及率は数%にすぎない。

大雪山系の森林資源を背景に製材、木彫、木工、家具などの産業が発展し、米、野菜、花卉などの農業も重要産業となっている。

「写真の町」で育んだ企画力

東川町開拓から90年たった1984年、10年後に迎える100周年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように描くかの検討が行われた。この結果、「大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきたことを受け、この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい」という定義が定められた。

これに伴い、普及して50年ほどの若い文化だとして「写真」に焦点があてられた。東川町は「開拓から100年足らずの若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながる」と考えた。

さらに、豊かな文化田園都市づくりを目指し、写真文化によって町づくりや生活づくり、人づくりを試み、出会いを永遠に記録する写真により、町の美を永遠にとどめるために活動することを謳い、翌1986年6月に「写真の町」誕生を宣言した。

そして、夏季の1ヶ月間を東川町国際写真フェスティバルにあて、内外の新人写真家の発掘、著名写真家や若い世代を含む写真愛好家らによるシンポジウム、各種写真展、写真を通じた自然観察講座、さらには「全国高等学校写真選手権」、通称写真甲子園など様々な催事を立ち上げた。

写真甲子園を主催する実行委員会には、東川町に加えて、近隣の旭川市、美瑛町、上富良野町、東神楽町、北海道新聞社、全国新聞社協議会など

も加わる。後援には、文部科学省、全国高等学校文化連盟、NHK、共同通信などが、特別協賛や協賛、協力にはカメラメーカー、大学、旅行代理店、航空会社、さらに全国展開の大手流通企業も名を連ねる。東川町単独ではなく、近隣自治体と広域的に取り組むことで全国レベルの協力を得るといふ構図がしっかりとできあがっている。

巧みな演出

1994年から始まった写真甲子園は、個人ではなく団体として競う催事だ。1チームはメンバー3



開会中に掲げられる幟とオリエンテーションの様子(写真提供:東川町)

人。予選を勝ち抜いた20チームが東川町に招かれ、旭川、美瑛、上富良野、東神楽でも撮影活動しながら、組写真という形式の作品を完成させる。

主催者は、武道の心技体から着想を得た「心技眼」を参加者に求めている。心技眼はそれぞれ次のように説明されている。

心: Message (発見力・テーマ・伝えたいこと)

技: Technic (技術力・構成力)

眼: Originality (表現力・独創力)

支給される白のモモンガのTシャツが写真甲子園のユニフォームで、チームごとに思い思いの色に染めて着用する。さらに運営スタッフは赤の、式典班、展示班、記録班などに分かれた高校生らのボランティア・スタッフは黄色のモモンガTシャツを着て、運営をサポートする。

参加チームは4日間、北海道の大地に触れつつ、チームメイトと議論を重ね、ひとつの組作品を仕上げてゆく。

4日間の努力が試されるプレゼンテーションと、結果が発表される授賞式もさることながら、閉会式で記録班が撮影した各チームの奮闘ぶりが大型スクリーンに映し出されると、参加者の雰囲気が一変するという。主催者は「これが“東川体験”。大会が終わると、ライバルだったみんなが、永遠の友だちになる」と謳っている。そこからは



写真甲子園のプレゼンテーションシーン(写真提供:東川町)

参加した各チームのメンバーだけでなく、映像の記録や編集で大会を支える同世代の高校生ボランティアの思いも伝わってくる。

実際に主催者のホームページに掲載された参加者の数々のコメントからは、写真甲子園が単に賞を競い合うものではなく、人としての成長を促す場となっていることが強く示唆されている。

写真甲子園の参加者には、通称「モモンガ米」と呼ばれるコメが送られる。甲子園の記念の砂にみたてたものだ。「ゆめびりか」の生産をはじめ、「ほしのゆめ」「おぼろづき」など新種のコメの開発・普及、さらには東川米ブランドの育成に尽力している町ならではのアイデアといえる。

また、応募作品は第一回から全て、東川町が永久保存している。関係者は、10年後、20年後、あるいは50年後でも、東川町を訪れば見せてもらうことができる。

外国人の滞在型旅行の受け入れへ

2009年、韓国から46人の中高生が来訪し、1ヶ月を東川町で過ごした。きっかけは、東川町にあった情報処理専門学校（当時）で学び、後に旭川大学に進学した韓国からの元留学生が、若者の減少など町の活力衰退を目の当たりにして、町長に滞在型の外国人の若者の誘致を勧める提言をし



たことだった。

その1年後の2010年に、東川町は、台湾に出張所を設置している町内の企業の橋渡しで、台湾からの日本語学習希望者の誘致を始めた。町は関係機関と連携して、日本語学習や日本の伝統文化を伝える様々なプログラムを提供する。日本語学習には、東川町に日本語科を設置する北工学園旭川福祉専門学校が協力している。

2011年、東日本大震災を受けて東川町は、最も多額の寄付を寄せた台湾の人々への謝意という趣旨で、「震災支援お礼プロジェクト」を立ち上げた。「絆」をテーマにした写真と小論文で選考し、90日間、東川町に無償で招待するという企画だ。台湾の駐日代表處、自由時報、長栄航空などの協力もありネットで話題となり、応募者は1,000人に膨らんだ。東川町側はその中から25人を選考し、招いた。東川町では約700万円の費用を負担したが、これにより、東川町の名前が台湾で一気に広まった。

東川町に住む人々のおもてなしも、台湾の人々の心を捉えているようだ。台湾から日本語学修のプログラムに参加するため東川町に滞在した「もも」さんは、SNSサイトで滞在中の経験を振り返りつつ、「初めて行った時、美しい景色を見ると感動しました。でも東川町は綺麗な景色だけじゃなくて、一番忘れられないのは人の人情味です」と



冬の東川町には、台湾の人達がつくった雪だるまが並ぶ
(写真提供：左 ひがしかわ観光協会、右 東川町での日本語学習体験者の葉松軒さん)

つづっている。東川町滞在中の様子をフェイスブックにアップしている人も複数いて、東川町を台湾の人々にとり身近な存在にしている。新婚旅行で再訪した折に撮影したウェディングドレス姿を披露している人もいる。

その後も東川町は30～90日というプログラムで、台湾からの日本語学習希望者の誘致を続けている。午前中を日本語学習にあて、午後は茶道、華道、陶芸、大正琴、料理、近隣観光地などへの小旅行やトレッキング(冬季はウィンタースポーツ)などにあて、休日は自由行動としている。参加費用は1ヶ月当たり13万7,500円。この中には授業料、宿泊費、教科書代、通学バス代が含まれている。一方、東川町では無料のレンタル自転車、町内で有効の商品券などを負担している。

東川町では2013年から、一定レベルの日本語能力のある若者を対象に、インターンシップの受け入れも始めた。期間は40日ないし60日間。対象者には、役場の窓口や観光案内所、民間のホテル、旅館で実務の現場に立ってもらう。滞在資格の都合で報酬は出ないが、宿泊などは東川町側で提供している。滞在中は、東川町が同じくインターンシップとして受け入れている武蔵野大学の学生との交流もアレンジされている。

2014年には、このインターンシップ・プログラ

ムを単位認定する大学も出てきた。同年にこのプログラムに参加した16人の中には、国立台湾大学の現役学生もいる。

思わぬ波及効果も

東川町は、観光客誘致も念頭におきつつ、2013年12月に台北に観光案内所を設置した。運営は台湾にある日系資本の企業が請け負っている。

その同じ月、台北のリージェントホテルには東川町で日本語を学習した体験を持つ台湾人150人と東川町などの関係者30人が一堂に会した。この頃までに東川町で日本語学習を受けた台湾人は300人、その半分が集まったことになる。

この場で「台湾東川会」が発足、毎年の会費の一部を東川町の「水と緑を守るプロジェクト」に投資すること、毎年行われる植樹会にはその時期に滞在している台湾からの研修生が参加することなどが決められた。

タイ政府から相談を受けた旭川市などの仲介で、タイから国費で来日する留学生に対する日本語研修の受け入れも始まった。このプログラムの推進にあたっては、ポンテープ副首相(当時)も東川町を訪問した。

海外メディアからも、東川町の日本語学習プロ



台北にある北海道東川町台湾観光案内所のパネル。看板は東川町でつくられた木工製。
(写真提供：株式会社スナークアジア)



台湾とタイの受講生の合同開講式(写真提供:東川町)

プログラムの1ヶ月コースに参加した人がある。シンガポール人で、雪景色などの映像コンテンツロケ地として海外メディア誘致を図る財団法人北海道コンテンツ戦略機構によるツアーで東川町を訪れた際にプログラムを知り、再訪したものだ。

東川町の日本語学習希望者の受け入れは、中国、ベトナム、中東、中央アジアの国にも拡大している。

今後の方向性として東川町の関係者は、日本語学習だけでなく、高齢化を背景とした介護研修や、

五輪を念頭に冬季競技向けのアスリートの育成などでも国際的な貢献をしていきたいと抱負を語る。東川町には、関係職員に五輪冬季競技種目の日本ナショナルチームでのコーチ経験者もいるという。また、近隣市町も含めると、冬季競技の練習場はほぼ一通り揃う。

そういえば、タイからの国費留学生の中には、滞在中、冬季五輪出場を目標にノルディックスキートのトレーニングに励んでいた人もいた。東川町ゆかりの、暑い国からの冬季五輪アスリート誕生も、あながち遠い話ではないかもしれない。

参考

東川町オフィシャルサイト

<http://town.higashikawa.hokkaido.jp/>

写真甲子園

<http://syakou.jp/>

東川町日本語実習概要

<http://snark.com.tw/Snark/study/hokkaido/short/inf001>

東川町企業実習概要

<http://snark.com.tw/Snark/study/hokkaido/intern>